

以下の文章は、若林幹夫著『社会学入門 一步前』からの抜粋である（ただし本文の一部を改変した）。①と②を合わせて八〇〇字以内で答えなさい。

①「役に立つ」と（役に立つ）の違いを説明しなさい。

②この違いを踏まえて、大学で社会学を学ぶことは、あなたにとってどういう意味で役に立つと思うか述べなさい。

**社会学は役に立たない？**

なぜ社会について考えるのか？

この問いに対して、この本の最初の章では次のようなとりあえずの答えを与えておいた。

社会について考えることは、どうしたって生きなくてはならないこの社会——さしあたって私たちは、自分がそこに産み出された社会を生きるほかない——をよりよく知ること、私と社会の関係がこれまでとは違ったものに見える可能性を開き、私たちが生きる社会が抱える問題や可能性に対する、より大きな視界を開いてくれるかもしれないからなのだ、と。

そしてまた、次のようにも述べておいた。

社会について考えること、もう少し特定すると、社会について社会的に考えることは何かの役に立つかもしれないし、実際に何かの役に立てばよいとは思うけれど、社会学者としての私は、それが役に立つことを必ずしも目的とはしていない。なぜなら、私にとっては社会を知ること自体が喜びの感覚を与えてくれるからである、と。

そしてさらに、次のようにも述べたはずだ。

社会を知るにあたって、それが役に立つかどうかということは、社会について考えることの幅をときに狭めてしまうのだ、と。このことの意味は、前の章で述べた「退きこもること」を思い出せば、より理解できるだろう。

だがしかし、そのように現実から距離を置いて社会について考え、それが何の役に立つかわからないけれど、それまでとは違う視点や視界が開け、そのこと自体に一定の喜びを得ることがあったとしても、それが何かの役に立たない以上はただの「自己満足」にすぎないのではないか？そのように問う人もいるかもしれない。

「社会学って、結局は現実に対して批評家的な立場からああだ、こうだと言っているだけで、具体的に世の中に働きかけたり、解決策を示したりすることはできないんじゃないですか？」

そんな言葉を私も直接、間接に聞くことがある。こうした問いに、ここまでこの本で考えてきた私たちは、どのように答えることができるだろうか。

**「役に立たないこと」は役に立たないのか？**

結論から言ってしまうと、右のような問いは、じつのところ「社会」について、そしてまた人間が社会を生きることについてのきわめて浅薄な理解と感覚からしか出てこないような問いなのだ。もう少ししていねいに言うと、こういうことだ。右のような問いは、人間と社会のかかわりを、そしてまたそこで何かを知ることや、何かを考えることを、「役に立つかどうか」という点からしか見ていない。まるでそれは、「役に立たないこと」は人間の社会の中では何の役に立たないことだ、と言っているようなのだ。

こうした言い方が奇妙に響くことは承知している。「役に立たないこと」が役に立たないのは当たり前ではないか、とすぐにも反論があるだろう。だがここで、最初にカギ括弧でくくった「役に立たないこと」と、その後で括弧くくりなしに書いた（役に立たないこと）——と便宜的に（ ）でくくっておこう——とを、私は違う意味で使っているのだ。

「役に立たないこと」とは「役に立つこと」ではないこと、つまり社会問題を解決したり、利益を上げるのにつながったり、それを知ること、自分のキャリアをアップできたりするものではないということだ。知が個人や組織の活動の効率性を上げたり、利益に結びついたり、福祉の向上を結果したりすることが「役に立つ」ことで、そうしたことにつながらないことは「役に立たない」ことだ。それに対して、先に括弧にくくらなかったほうの（役に立たないこと）は、「社会的に意味をもたないこと」という意味で使っている。だから「役に立たないこと」は役に立たない」とは、個人の組織の活動の効率性を上げたり、利益を上げたり、福祉を向上させたりすることに結びつかない知は、社会的に意味のないことだ、ということになる。

だがしかし、「役に立つこと」だけが社会的に意味のあることなのだろうか？私たちが社会を生きるうえで有意義なことは、自己や他者の「役に立つ」ことだけなのだろうか？

「AはBである」という命題が真であるとき、その対偶「BでないものはAでない」もまた真である。「社会的に意味のあること」は「役に立つこと」である」という命題の対偶は、「役に立つこと」でないものは「社会的に意味のあること」ではない」だ。では、個人や組織の活動の効率性を上げたり、利益に結びついたり、福祉の向上に結びつかないことは、社会的に意味をもたないことなのだろうか？

私たちの社会では、「社会的に意味がある／ない」ということが、「何かの役に立つ／立たない」ということとしばしば等号で結ばれてしまうので、このような問いを立てても、その意味するところがわからないという人もいるかもしれない。だから、もう少し具体的に考えてみよう。

### 遊びと恋愛

たとえば「遊び」。

遊びは文化であり、社会的な行為でもある。だが、私たちが「遊び」と見なす行為は、普通の意味では「役に立たない」。いや、「役に立つこと」から解放されて、身体的、精神的な活動をそれ自体として無償で楽しむことが、その活動が「遊び」と見なされるための要件である。草野球の試合は遊びだが、プロ野球選手の試合はこの意味では「仕事」である。いや、遊びは仕事や人間関係のストレスから人を解放し、さらなる活動への活力を生み出すから「役に立つ」のだ、という説明もあるだろう。子どもの遊びは大人社会のさまざまな活動への準備として「役に立っている」という説明もしばしば聞く。そのような説明がまったく間違いないとは言わないが、そのような「役立ち」によって遊びを説明してしまうとき、私たちは結局「遊び」が「遊び」である所以、私たちが他者とのつながりの中で「遊ぶ」ことの意味を、決定的に捉え損ねてはいないだろうか？ まるでそれは、健康のためだからというそれだけでジョギングを続ける生真面目なランナーのようではないだろうか？ だが、本当に楽しいジョギングとは、何かのために走るのではなく、走ることが楽しいから走るのではないだろうか？ (中略)

もうひとつ別の例として、「恋愛」を考えてみよう。

恋愛の意味とは、それが何かの役に立つということにあるのだろうか？ 「恋愛すると綺麗になる」とか、「恋愛は若さの秘訣」とかいう言葉はときどき聞くし、生殖行為を行ない、子孫を増やすという生物学的な目的のために恋愛は有意義であるという説明もあるだろう。だがしかし、そのように何かの「役に立つ」ものとして恋愛を語るとき、まさにそのことによつて恋愛の意味を決定的に捉え損ねてはいないだろうか？ (中略) もっとも実際には、この社会で「恋愛」と見なされる多くの関係は不純な要素を含んでいる。だがしかし、そうだからといって「恋愛」のコードを「玉の輿に乗るため」とか、「自分の彼女を人に見せびらかして優越感を得るため」とかの手段であるというふうに書き換えてしまったとしたら、とたんにそれは私たちが知っている「恋愛」とは別の何かになってしまいうだろう。それは、私たちの社会の恋愛のコードの中核に無償性があるからである。それが無償であるがゆえに、恋愛は意味がある(とされている)のだ。

遊びも恋愛も「役に立つ」ことではない。だが、そうであるからといって、それらの行為や関係が社会的に無意味なのではない。それどころか、遊びも恋愛も、その行為や関係を通じて楽しさや悔しさ、熱狂や落胆、充実感や喪失感といった意味を自己と他者の間に生成する、まさに有意義な行為や関係である。強いて「役に立つ」という言葉を使うなら、それらの行為や関係は人生を「役に立つ」こととは別の形で有意義にするのに(役に立つ)。だが、「役に立つ」のとは別の形で(役に立つ)ということとは、そのことはもう「役に立つ」という枠組みの外側に踏み出してしまっているということだ。

### 「役に立つこと」で理解する浅薄さ

社会学は何の役に立つのかという問いを、ここで言う「役に立つ」という意味で問うことの無意味さと浅薄さとは、社会を「役立ち」のネットワークとして理解しようとするこの無意味さと底の浅さである。

(中略)

社会学でしばしば使われる概念を用いるなら、そのように問う人は、社会の中での有意義性を、行為や関係の「手段性」においてしか評価していない。手段性とは文字どおり行為や関係が何かの目的のために手段として役に立つかどうかということだ。だが、人間の社会には手段性とは異なる、そのこと自体に意味や価値が見出される行為や関係がある。そのような行為や関係の属性を、コンサマトリー即自的という。遊びや恋愛はコンサマトリーな行為や関係の代表である。

科学について考えたところで、目的合理的行為と価値合理的行為ということを述べたのを思い出してほしい。目的合理的行為とは、ある目的を達するのに最も効果的かつ効果的なものであることによつて合理的、つまり「理にかなっている」と見なされる行為のことだ。それに対して価値合理的行為とは、効率的でも効果的でもないかもしれないが、美意識や道徳などの行為の適切さや卓越性を評価する基準に従えば、最も適切であると見なされるような行為である。「役に立つ」

という基準は、目的合理的な行為の評価基準にすぎないのだ。

しかも人間の行為は合理的な行為だけではない。感情的な行為もあれば、昔から行なわれていたという理由でその合理性を問われることなく反復される伝統的な行為もある。精神疾患における強迫行為のように、通常の意識レベルでは理解不可能で端的に「無意味」に見えても、無意識の水準では有意義なものとして理解可能なものもある。ハイデガーが技術について言うように、それがもつ意味が私たちから隠されており、その隠されたものによって私たちの社会のあり方が方向づけられてしまうような不気味な意味もある。私たちが生きる世界は、そんなさまざまの意味に満ちており、私たちは日々の営みを通じてそうしたさまざまな意味の重なりあい、連なった世界を作り上げている。社会について考えるとは、そうした重なり連なるさまざまな意味へと思考と感覚を開いていくことなのだ。